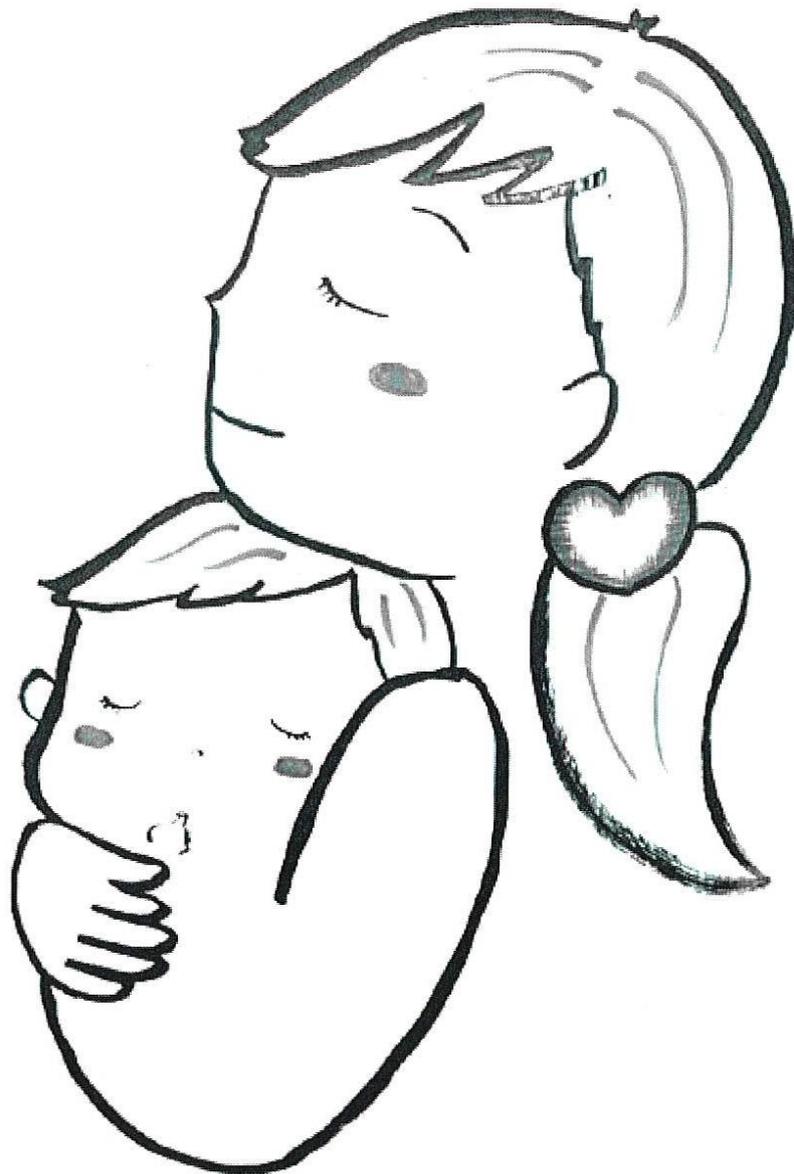


子どもも大人も一人ひとりが主人公
～安心と挑戦を支え合うチームおおぞら～

《1年次 研究報告》



イラスト：おえかきプロジェクト

森川佳子・田村早希子・後藤恵子

金物谷真紀・西岡直美・内川智沙

子どもも大人も一人ひとりが主人公

～安心と挑戦を支え合うチームおおぞら～

八尾市立志紀おおぞらこども園

所在地：八尾市志紀町西2-1-10

電話：072-949-3194

園長：岡内 郷子

◆クラス編成◆

〈乳児クラス〉

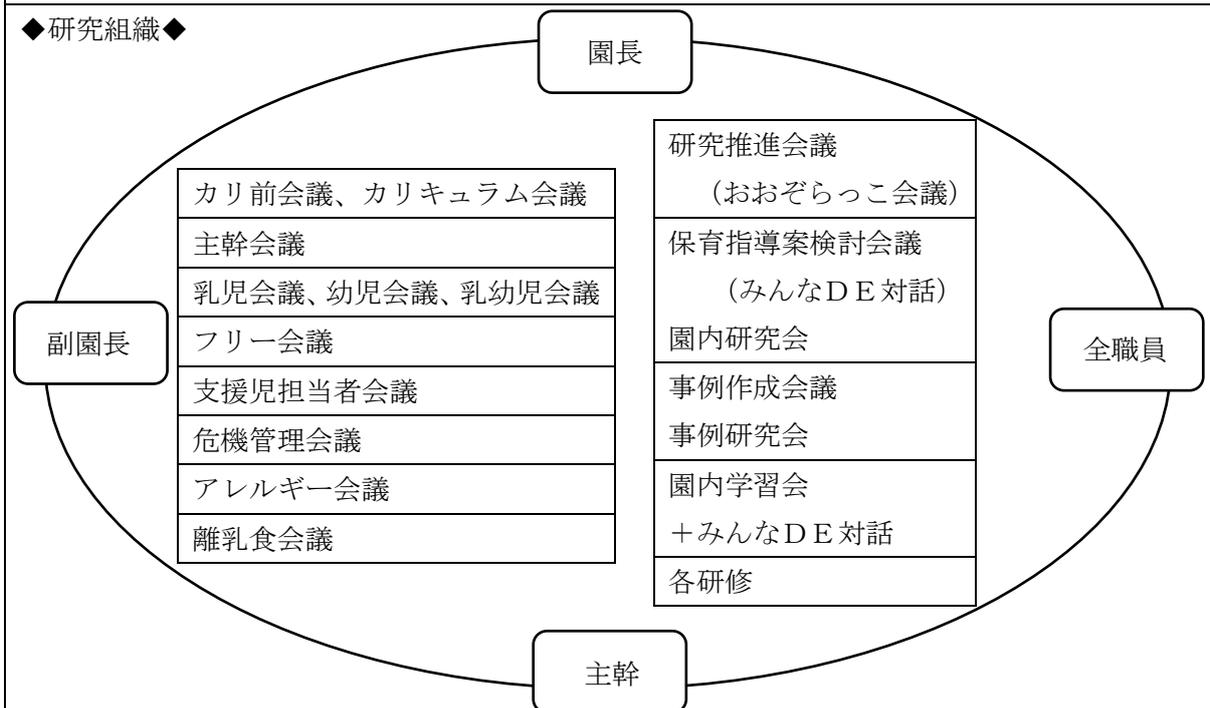
0歳児	1歳児		2歳児		合計
ひよこ組	うさぎ組	りす組	きりん組	ぞう組	57名
6名	12名	12名	14名	13名	

〈幼児クラス〉

3歳児			4歳児		5歳児		合計
いちご組	めろん組	ぶどう組	こすもす組	ひまわり組	ほし組	にじ組	172名
19名	19名	19名	29名	29名	28名	29名	

合計： 229名

◆研究組織◆



1. 研究テーマについて

(1) 園の実態とそこから見える課題

子どもの思いを尊重し、“もっとやりたいと思える遊び環境づくり”について取り組んできたことで、子どもたちが繰り返し遊びを楽しんだり、継続・発展して遊ぼうとしたりする姿につながると感じている。

今年度、一人ひとりの“もっとやりたい”“やってみよう”という気持ちを育むためには何が必要か職員間での対話を通して学び合うことを大切にしてきた。子どもが外の世界に目を向け一歩踏み出すための基盤として、『アタッチメント（愛着）＝安心』が必要であることが分かり、保育者の受容的・応答的なかわりを意識して保育実践に努めるようにした。しかし“一人ひとりの言葉にできない心の奥にある思いを受けとめ寄り添うこと”や“肯定的なあたたかい言葉を届けること”という点では課題もある。園内学習会や園内研究会、事例研究会などを通して“保育の中で大切にしたいこと”“子どもたちの安心感について”職員間で対話を深め、実践とつなげてきた。

支援を必要とする子どもや外国にルーツのある子どもが多い中で、子どもたちの背景に心を寄せてありのままの姿を受けとめ、子どもたちが安心感をもって過ごせるようにしていきたいと考えている。

“子どもたちの思いを実現するための環境づくりがしたい”“職員間の対話を大切にしたい”という思いがありながらも、理想通りにはいかず、時間の捻出に課題を感じている。また、発言することを躊躇する保育者や、悩みを打ち明けにくかったり、保育を語ることに自信がもてなかったりして、一歩踏み出しにくい保育者もいる。保育者は子どもたちの成長を支える環境として重要な存在であることを意識し、対話を深め研究を進めていきたい。

(2) 研究テーマの考え方

保育者がまず子どもたちの安心できる存在となり、その安心を土台に“やってみよう”と挑戦しようとする気持ちにつながる環境を整えたり、不安な時や失敗した時に戻ってこられる『安心基地』になつたりしたいと思っている。

子どもたちが安心感をもって過ごし、自分や周りの人・ものを大切にしながら環境にかかわっていくためには、保育者が何を大切にしてどのような心もちで、言葉かけや援助をしていくのかを職員間の対話を通して考え、深めていきたい。心が動く環境を整えることで子ども自ら、不思議さやおもしろさを感じ、主体性や探求心を育めるようにしたい。

職員間での話し合いを通して、こども家庭庁『はじめての100カ月の育ちビジョン』にある『安心と挑戦の循環』が、私たちが学び、実践したいことであり、研究テーマに『安心と挑戦』を入れることにした。

失敗を恐れず『ケセラセラ（なんとかなるさ）』を合言葉に、職員全員が思いを一つにし、チームとしての意識をもちながら対話を重ね、子どもたちの安心と挑戦を支える存在になりたい。

テーマにある『大人も』には、保護者や地域の人たちも含み、子どもたちのウェルビーイング（身体・心・環境（社会）の面での幸せ）を高めるため、ともに子育てをする伴走者となるように支援していきたい。また、一時預かり保育や地域交流利用の子どもたちやその保護者も支えていきたいと考えている。



こども家庭庁
『はじめての100カ月の育ちビジョン』
より参考

志紀おおぞらこども園にかかわる全ての子どもも大人も一人ひとりが主人公であり、安心と挑戦を支え合うチームをめざしたいという思いからテーマを以下のように設定した。

★研究テーマ★

子どもも大人も一人ひとりが主人公
～安心と挑戦を支え合うチームおおぞら～



『挑戦』という言葉の捉え方

『挑戦』ときくと『新しいことに挑んでみる』『難しいことに果敢にチャレンジする』というイメージがある。私たちの考える『挑戦』は、こども家庭庁の『はじめの100カ月の育ちビジョン』と同様に、子どもたちの挑戦の第一歩である『外の世界に目を向ける』『自分の世界を広げていく』というような考え方や捉え方をしていくことを、職員間で共有している。



やってみようかな

何しているのかな？



2. 研究方法について

【研究推進会議（おおぞらっこ会議）】

学年の代表者が集まり、日々の保育の悩みや課題を持ち寄ったり、研究テーマに迫る思いを出し合ったりする。“代表者は交代で出席し、全員が参画意識をもつ”“どんな意見でもOK！と多様な意見を受けとめる”“互いを尊重し合う”を大切に、全職員の研究への参画やチームとしての意識を高めていく。

また、職員の得意を生かす『おえかきプロジェクト』を立ち上げ、研究冊子の表紙や挿絵、ポスター、資料など、プロジェクトに参加する職員が描き、力を発揮できるようにする。

【保育指導案検討会議（みんなDE対話）】

保育指導案作成前に、子どもの実態や保育者の願い、環境づくりについて語り合ったり、参加者全員で保育を振り返ったりする。当日予想される子どもたちの姿から“保育のねらい”や“子どもたちの興味・関心に沿った保育者のかかわり”“保育者の悩み”などを対話しながら、保育指導案に反映していく。また、保育の悩みを解決し研究テーマに迫るものになるよう、当日の討議の柱を探っていく。

【園内研究会】

保育を公開し、『安心を基盤に挑戦している子どもたちの姿』を参加者で見取る。また、研究討議で、担任の悩みや課題から考えた討議の柱をもとに、『安心と挑戦を支える環境構成や保育者の援助』について、学び合う。参加者とともに語り合う中で、安心と挑戦を支える環境の再構成や保育者の言葉かけ・かかわり方の見直しにつなげ、保育の質を高めていく。

【事例研究会】

子どもたちの心が動いている場面の事例から、子どもの心情や遊びのプロセスを探り、参加者一人ひとりの視点で意見を出し、研究テーマに沿って討議する。また、参加者の見取りから“安心と挑戦につながった要因”と、そこから“どんな育ちや学びにつながったのか”を考え、事例を通して多様な子どもの心情や育ちがあることに気づき、子ども理解を深める機会とする。

【園内学習会】

グループワークでは、広い視点で子どもたちの姿を捉え、対話を通して、思いを共有し、チーム力を高めることをねらいとする。クラスの実態や保育者の悩みから各月の議題を設定し、日々の保育に生かし、保育者自身の活力になるように話し合い、一人ひとりの学びの場となることをめざす。

3. 研究実績一覧

(1) 園内研究会 討議の柱：安心と挑戦を支える環境づくり

	日付	学年	討議の柱 副題
1	7/3	0歳児	一人ひとりの発達に合った環境づくりとは
		2歳児	子どもたちの“やってみたい”が叶う環境づくりとは
2	11/11	1歳児	あーだこーだとやってみた部屋の環境から、みんなで語り合おう
3	11/20	3歳児	一人ひとりの“楽しい”を叶えるために、今保育者ができることは
4	12/11	4歳児	身近な人やものに触れて、一人ひとりが心ゆくまで楽しむ保育者の見取りと環境づくりとは
		5歳児	やりたい放題から安心して過ごせる空間へと変容を遂げたものとは

(2) 事例研究会 討議の柱：安心と挑戦を支える環境づくり

	日付	学年	討議の柱 副題
1	6/12	5歳児	カチコチの心をほぐし、一人ひとりが自己表出できる保育者のかかわり方とは
2	7/25	3歳児	“もっとやってみよう”と思える環境づくりと保育者のかかわりとは
		一時預かり	一時預かりだからこそできる保育者のかかわりとは
3	9/9	2歳児	気になるものに触れようとした心の動きを支えたものとは
		4歳児	心の動きを汲みとり、挑戦やつながりが広がる環境とは
4	11/28	0歳児	“ぼくをみて～！もっともっと！”に応答するために、保育者が大切にしたいこととは
		1歳児	“いやや！とらないで”から、追いかけてまで一緒に見ようとしたほど心が動いた要因とは

(3) 研究推進会議（おおぞらっこ会議）

	日付	内容
1	4/1	研究テーマについて／学びたいこと・やりたいこと／園内研究会について
2	4/11	研究推進会議名称について／研究テーマ決定に向けて／園内研究会日程決定
3	5/14	育てたい子ども像・大切にしたいことについて／実習生・子ども体験について
4	6/6	輿石先生のご講演を受けて／園内研究会の進め方について／各学年の悩みや課題
5	7/11	各学年の『安心ってどんなこと』を共有／園全体で大切にしたいこと
6	9/1	研修冊子作成について／各学年の悩みや課題
7	10/1	育てたい子ども像に向けて取り組んできたこと／研究冊子について

8	11/12	『保育と講演』中間発表について／1年次研究を振り返って
9	12/4	『保育と講演』中間発表内容について／中間発表作成
10	1/8	各学年の『チームって、なんだろう？』を共有／研究2年次に向けて
11	3/4	おおぞらっこ会議・研究1年次を振り返って／対話を深めるために

(4) 園内学習会

	日付	内容
1	4/23	園長経営ビジョン／人権擁護のためのセルフチェック／研究テーマについて 【みんなDE対話】研究テーマをもとに話し合おう 『育てたい子ども像、大切にしたいこと』
2	5/28	インクルーシブ教育・保育について大切にしたいこと 興石先生ご講演 『「環境」を考える上で大切にしたいこと』
3	6/24	一時預かりについて知ろう／特別保育報告／保育力アッププロジェクトレポ 【みんなDE対話】安心について話し合おう『安心ってどんなこと？』
4	7/24	サポート児ダイアリーについて／幼保連携型認定こども園教育・保育要領について 【みんなDE対話】1学期を振り返る『1学期総括』
5	8/28	研究冊子について／実習生・子ども体験レポ 【みんなDE対話】サポート児・気になる子どもについて話し合おう 『サポート児、気になる子どもについて』
6	10/29	研修報告／実習生・子ども体験レポ／ファシリテーター経験レポ 【みんなDE対話】『育てたい子ども像に向けて取り組んだこと』 『各学年で研究冊子作成』
7	11/27	『保育と講演』中間発表について 【みんなDE対話】保護者の安心感について考えよう 『保護者理解から考える保護者支援』『各学年で研究冊子作成』
8	12/23	『保育と講演』公開保育・中間発表について／地域のつながりについて考えよう 【みんなDE対話】チームについて考えよう 『チームって、なんだろう？』
9	1/28	チームおおぞらで考えたチームとは／実習生・子ども体験レポ 【みんなDE対話】1年次の研究で学んだこと、感じたことを話し合おう 『1年次の研究を振り返って』
10	2/26	特別支援教育コーディネーターより／西郡研究発表報告 【みんなDE対話】研究2年次に向けて話し合おう 『育てたい子ども像から見えてきた子どもの成長と次年度の課題』 『学年間、職員間のチームについて』
11	3/11	【みんなDE対話】来年度に向けての1年間の振り返り 『年間総括』

【みんなDE対話】って？

保育指導案検討会議と呼んでいた会議を、堅苦しくなく参加しやすいように『みんなDE対話』と名づけた。会議の進め方を工夫したことで、参加者から緊張感が安心感に変わったという声もあがっている。保育者間での話し合いを『みんなDE対話』と称して、園内学習会でも取り入れることでネーミングの定着と『対話』を意識できるようにした。

4. 研究内容について

(1) 各学年の取り組み

0歳児

～育てたい子ども像～

- 保育者に見守られながら、ものや人に興味をもち、かかわろうとする子ども



7月3日 園内研究会（ひよこ組）

～感じたことや学んだこと～

子どもが自らものや人に興味をもち、かかわろうとする姿を育てたいと考え、試行錯誤しながら保育をしてきた。子どもが周囲のものや人に興味をもち、かかわろうとするためには、まずは、安心できる環境が大切であると考えた。そこで、子どもにとっての安心とはなんだろうか？と担任間で話し合いをし“この人がいるなら大丈夫”“自分は守られている”“自分は大切にされている”と子ども自身が感じられること、つまり子どもと保育者の間に深い愛着関係があることではないかと考えた。保育者は子どもの思いや気持ちをありのまま受けとめ、子どもの言葉にならない思いを汲みとり、共感したり言葉にしたりして愛情をもってかかわることを大切に、保育をしてきた。公開保育当日“保育者がいつものように笑っている”“いつもと変わらない保育者が近くにいる”という安心できる環境が、子どもの“いつものように遊ぶ姿”“自ら遊ぶ姿”につながったのではないかと、興石先生より助言いただいた。担任は、子どもたちにとって安心の存在となれているんだ！と、嬉しく思うと同時に、安心できる環境の大切さを改めて感じる事ができた。

After

～その後の子どもたちの姿や変容～

- 子どもたちは保育者をより信頼し、泣いたり、笑ったり、怒ったりして気持ちを出するようになった。
- 「いや」「あっち」など簡単な言葉やしぐさで、気持ちを伝えようとする姿が増えた。
- 保育者という『安心の存在』が近くにいることで、慣れない場所でも、安心して探索を楽しむようになったり、見慣れない保育者にも自分から興味をもち、かかわろうとしたりするようになった。
- 不慣れな食材も、保育者がおいしそうに食べる様子を見て、自分も食べてみようとするようになった。

～安心と挑戦を支えた保育者の心もち～

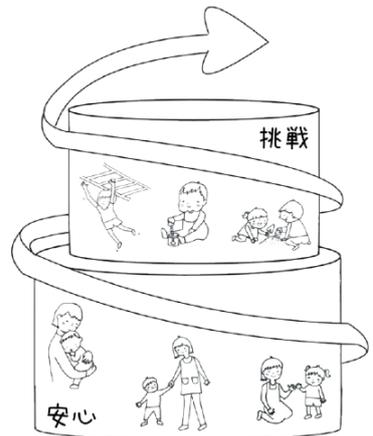
- 0歳児は、安心の土台をつくるうえで、大切な時期と担任間で共有している。
- 子どもが“この人がいるなら大丈夫”“自分は守られている”“自分は大切にされている”と、より感じられるように、一人ひとりの子どもの思いや気持ちをありのまま受けとめることが大切であると深く考えるようになった。
- 子どもの言葉にできない気持ちに思いを寄せ、気持ちを汲みとり、共感したり言葉にしたりして愛情をもってかかわることが大切と感じるようになった。

安心を基盤に挑戦している子どもの姿

手、もっていてね!

つかまり立ちができるようになったことが嬉しくて、保育者の手をひっぱり“手をもって”と要求。保育者に手を持っていてもらっただけで、安心!足を踏み変え楽しそう!!

(記録者/田村)



こども家庭庁
『はじめての100か月の育ちビジョン』
より参考

これなんだろう?

散歩で探索中。くるくる回ってうごめくものが…!!(風に吹かれてくるくる回る枯れ葉)“これはなに?”と、発見を指さしして伝えてくれました。謎の物体の近くまでいき保育者の顔を見て「あ」と一言。保育者に「大丈夫よ」「こわくないよ」と声をかけられると夢中になって触っていました。

(記録者/山口)



挑戦

せんせ〜、いくよ!

一人歩きができるようになり、嬉しくて、大好きな先生めがけてレッツトライ!保育者に「すごいね」「できたね」と認められて嬉しそう!!

(記録者/山口)

ちょっと、ひとやすみ…

朝ちよっぴりご機嫌ななめでやってきて“ママといたい、離れたくない”気持ちがまだ消化できずにいる様子。先生の肩にもたれて抱っこされながら、ちょっとひとやすみ…。「ママといたいよね」「ママ大好きやもんね」と気持ちに共感されることで、少しずつ気持ちを切り替えていきます。

(記録者/山口)



せんせ〜♡

お気に入りのおもちゃで遊ぶことが大好き!!時々思い立ったように保育者にべったりくっついては、嬉しそうな顔でのぞいてきます。「だいすきよ〜」と声をかけると満足そう♡

(記録者/山口)

おなかへった〜!!

“おなかへったよ〜!!”準備中の給食を見て泣いていたAちゃん。「お腹へったよね」「もうすぐご飯だからね」と保育者に抱きしめられると、少しずつ気持ちが落ち着きました。泣いたり笑ったりしながら、保育者に気持ちを伝えていきます。

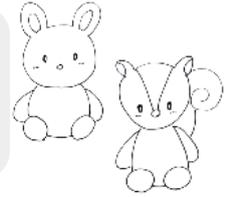
(記録者/田村)



1歳児

～育てたい子ども像～

○安心して生活する中で、興味や関心のあることを
“やってみよう”とする子ども



11月11日 園内研究会（うさぎ組）

～感じたことや学んだこと～

4月から担任間で子どもの姿を共有することを大切にし、今の子どもたちにとって必要な環境は何かを話し合いながら、環境づくりをしてきた。好奇心旺盛で視界に入るもの一つひとつに興味を示す子どもが存分に遊ぶための、遊び空間の整え方について悩んでいた。保育指導案検討会議（みんなDE対話）では、子どもの姿やクラス内の環境構成について悩みをきいてもらった。参加者から、落ち着いてゆったりと机上遊びができるように食事スペースを使用することや、遊びが混在しないように動線を考えて空間分けをすること、車遊びでの道路を色々な体勢でできるようにしていただくことなど多くのアドバイスをもらえ、環境を整えるヒントにすることができた。

当日は予想と違い、ブロック、車遊びをする子どもが少なかったが、絵本、ままごと、シール貼り、トンネルなど、それぞれの遊び空間を確保したことで、存分に遊べた。指導助言から、環境を整えるだけでなく、それらを使って遊ぶ子どもの姿を見取り、どんな遊び方をするか、どう遊ぶか、どんなことに興味をもっているか、どんなことを学んでいるか、育っているのかを考えるととても重要だと改めて知った。今後も、より子どもの姿の見取りを大切にしていきたいと思った。

After

～その後の子どもたちの姿や変容～

- 散歩や戸外遊びで自然物に触れる機会が増え、ドングリや葉っぱに興味をもち始めた。保育室に落ち葉でつくったモビールやカード落としを準備した。揺れる落ち葉に手を伸ばして取ろうとしたり、色々な形の落ち葉を眺めながらゆっくり落としたりと楽しむ姿が見られるようになってきた。
- 保育者それぞれの視点で、子どもの姿を見取ったことを共有し、必要な環境を考え準備してきた。子どもたちにとって保育室がより楽しい場所になり、落ち着いて遊ぶ姿も見られるようになった。
- その日の心もちや遊ぶ様子に合わせて、食事スペースやランチホールを利用するかを保育者間で相談・連携したことで、安心・安全に遊べた。

～安心と挑戦を支えた保育者の心もち～

- 日頃から保育者間で子どもの姿を丁寧に共有することが大切であると改めて感じた。
- 子どもたちがどんな遊び方をするか、どんなことに興味をもったり、学んだりしているかなど、子どもの姿から見取ったうえで、必要な環境を再構成していくようになった。
- 子どもの小さなしぐさや、表情にも気づき、援助することを意識するようになった。
- 子どもたちが安心して過ごせるように、保育者が心に余裕をもち落ち着いて保育をすることを心がけるようになった。

安心を基盤に挑戦している子どもの姿

自分でやりたいの

少しずつ自分でやりたい気持ちが高まってきた頃。自分の服の袖を、一生懸命引っ張って脱ごうとしています。保育者はその気持ちを汲んで、見守ったりさりげなく援助したりして“自分で！”の気持ちを尊重してかかわっています。

(記録者／花市)



上手に食べられるようになったよ～!

担当保育者に見守られることで、安心して自分でスプーンを使って食べようとチャレンジするようになってきました。一口食べて「おいしっ」と伝えてくれます。同じグループの友だちと一緒に食べるのっておいしくて、嬉しいね!

(記録者／加本)

初めてのフィンガーペインティング

絵の具を手につけ、ぺたぺた・ぬりぬりして楽しむ友だちや保育者の姿を見て、少しずつ“ぼくもやってみたいなあ”という気持ちに…。保育者が手を添えて試してみると“色がついた!”と心が動いたことがきっかけになり、みんなと一緒にぬりぬり!最後は、手や顔が絵の具だらけになるほど大胆に表現することを楽しみました。

(記録者／諸沢・金木)



きもちい～

テラスでの水遊び。初めはどう遊ぶのか分からなかった子どもも、保育者と一緒に遊ぶ中で徐々に水の感触、水遊びの楽しさに気づいてバシャバシャと大胆に遊び出しました。水にも興味をもち、「つめたっ!」と水とは違う感触にびっくりした様子でした。

(記録者／小森)

これ、どーぞ!

保育者に自分の気持ちを代弁してもらったり、自分の行動を認めてもらったりする経験を重ねてきたことで、友だちに“どうぞ”ができることが増えてきました!玩具を通して、少しずつ友だちとのかかわりも出てきました。

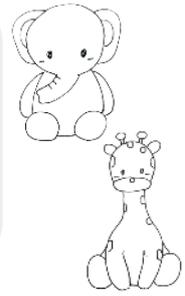
(記録者／福井)



2歳児

～育てたい子ども像～

- 保育者に気持ちを受けとめてもらいながら、安心して自分の思いを出す子ども
- 自分の好きな遊びを全力で楽しむ子ども
- 身近なものや人に興味をもち“やってみよう”とする子ども



7月3日 園内研究会（きりん組）

～感じたことや学んだこと～

新しいクラスにも慣れ「イヤ！」と気持ちを表出することが増えてきた。中には、保育者と1対1のかかわりを求め、くっついてなかなか離れなかったり、遊びが見つからずに転々としたりする姿もあった。

研究討議では、子どもたちの“やってみたい”が叶う環境づくりについて考えを出し合った。一人ひとりの遊びを尊重することや、自分はこれがしたい！と気持ちを出出することで“やってみたい”につながるのではないかとの意見もあった。また、その思いを出せない子どもの気づきも大切に、安心できる保育者と一緒に遊ぶことで“やってみようかな”という気持ちの一步になっていることを学んだ。

指導助言では、ゆったりと遊べる時間を確保することで、保育者もじっくりと子どもとかわかれ、今何に興味があるのか、どこが楽しいのかを見取ることができると学んだ。子ども一人ひとりの姿を見取って、遊びの環境を整えていく大切さや、子どもとじっくり、とことん遊ぶことで、安心と挑戦が循環するポイントになると知ることができた。

討議の中で、私たちが日々保育で大切にしていることに気づいてもらえたことが嬉しかった。また、意識できていなかったことにも気づいてもらえ、教えてもらえたことで、自分たちの保育は間違っていなかったんだという保育者の自信にもつながった。

After

～その後の子どもたちの姿や変容～

- 保育者とのかかわりを求めることが多かったが、遊びのタイミングを見て保育者が仲立ちし、友だちとのかかわり方を伝えていくことによって、少しずつ友だちとイメージを共有し、遊びや会話を楽しむ姿が見られるようになってきた。
- 「お外行きたい」「虫とりがしたい」「もっと遊びたい」と、したいことを保育者に伝えるようになった。
- イヤイヤは継続しつつも、身のまわりのことを自分でやってみようとする姿が出てきた。

～安心と挑戦を支えた保育者の心もち～

- 担任間で子どもの姿やつぶやきを伝え合ってきた。どうしたらもっと遊びが広がるのか、そのためには何を準備すればいいかなど、保育の幅が広がり、対話の大切さを知った。
- 子どもたちのイヤイヤにどうかかわったらいいか悩んでいたが、“イヤ！”と言えることは自分を出せていると、プラスに捉えるように助言をいただき、子どものイヤイヤに少し余裕をもって対応できるようになった。
- 引き続き、保育者も子どもと一緒に全力で遊び“楽しい”気持ちに共感することを大事にしている。

安心を基盤に挑戦している子どもの姿

かた とんとん♪



ふれあい遊びの♪かたたたきを何度か楽しんだ後、曲をかけると一人また一人と子どもたちが後ろに行き、友だちと肩たたきする姿が見られました。友だちと一緒に楽しいね！

(記録者/木ノ本)

おふとんかけて～!

“先生が楽しそうなことしてる”
→ “自分もやってほしい” へ興味をもって遊び始めた新聞遊び。友だちと同じ空間で遊ぶ心地よさを感じたり、開放感を味わいながら遊んだりするようになっていきます。

(記録者/寺田)



難しいね



スプーンの下手持ちにチャレンジ。

「あっ、ちょっとちがうかも？」

「あれ？あってる？」

時には友だち同士で、見合っこ、教え合っこをする姿も見られます。

(記録者/山口・岡林)

保育者への安心
友だちへの安心
自分の自信・挑戦



ドキドキ…でもジャンプしたい

中学校のグラウンドにある砂山で「先生見てて～！」と声をかけながら思いきりジャ～～～ンプ！！少し高さのある段差が子どもたちにとってはちょっとした挑戦！自分でやって、できた喜びを感じています。

(記録者/柳)

見て見て!自分ではけるよ!

外で遊びたいという思いから靴の脱ぎ履きを頑張ってきました。保育者に視線を送り、「見て！自分で履けるよ！」と自信たっぷりの表情を見せてくれます。

(記録者/小田)

(触って)いい?



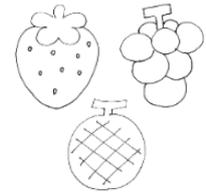
虫には興味があるものの触るのは怖い様子。友だちの姿を見ていたので促してみると“触ってみようかな”が増えてきました。保育者がアオムシの世話をしていると「(触って)いい？」と初めて自分から“よしよし”と撫でることができました。その時の表情がすごく嬉しそうでした。

(記録者/寺田)

3歳児

～育てたい子ども像～

- 自分の好きな遊びを見つけて、繰り返し楽しむ子ども
- 安心できる環境の中で、やってみようとする子ども



11月20日 園内研究会（いちご組・めろん組・ぶどう組）

～感じたことや学んだこと～

好きな遊びが見つかるようになり、繰り返し遊ぶ姿が増えてきた。一人の空間を楽しみたい姿や、友だちのしていることに興味をもち始め、かかわりたいと思う中でぶつかってしまう姿もあるため、一人ひとりが存分に楽しむための環境構成に悩んでいた。また、中には保育者に対して愛着を求めた試し行動があり、かかわり方の難しさも感じていた。

学年での話し合いや保育指導案検討会議（みんなDE対話）を通して、子どもが“今何に楽しさを感じているのか”“楽しんでる遊びを広げたり、友だちの遊びに興味をもったりするにはどのような援助が必要か”を担任6名でもしっかりと確認し合った。学年として何を大切にしていくなのか、子どもの姿を語り合うことで、深く考えるようになった。クラスを安心できる場としながら、クラスを越えたかかわりも大切に保育をしていきたい思いから、3歳児合同で園内研究会に取り組んだ。

当日は、保育者のかかわり方や環境づくりについて参加者から具体的な意見をきくことで、今まで気づけなかった視点や発想にふれ“やってみよう”とワクワクする気持ちになった。また、指導助言から、“やりたい”だけではなく、保育内容が、3歳児の発達を捉えているのかを見極める視点が大切だと分かった。今（11月）が一番、3歳児らしさが出ている時期であることも知り、子どもたちと一緒に日々の遊びを楽しみたいという気持ちがさらに深まった。

After

～その後の子どもたちの姿や変容～

- 廃材を使って“こんなものをつくってみたい”と試したり繰り返したりして、つくることがさらに楽しくなっている。
- “貼りたい”“切りたい”と思える3歳児の発達に合った材料をたくさん準備することで、のりやハサミを使って“楽しかった”“もっとやりたい”という気持ちで遊ぶことが増えてきている。
- ドングリ転がしに桶を使用したことで、より転がすことを楽しめるようになった。また、テラスに設置したことで、他のクラスにも遊びが広がった。
- 廊下でもやりたい遊びをつくり、思いを実現したことで、他クラスの子どもたちが自然と集まり、遊びが盛り上がってきている。

～安心と挑戦を支えた保育者の心もち～

- 一人で抱え込まずに、担任6人が安心できる関係となったことで、たくさん悩みを相談したり、連携をとったりしやすくなった。
- 園内研究会で、保育を肯定してもらえたことで“ありのままの自分で大丈夫”という安心感につながった。
- 遊びのアイデアや子どもの見取り方についてアドバイスをもらったことで、保育の引き出しが増え、少し余裕をもって保育をすることができるようになった。
- 保育者も結果に捉われず“やってみよう”という気持ちになり、子どもたちから大切なことを学んだ。

一人ひとりがじっくり



つくるのって、たのしいな！

4・5月は紙をちぎったり、空き箱を積み上げたりすることに大満足！そこで、広告紙を扱いやすいサイズにカットして、いつでも使える場所に置いておくと…遊び方がどんどん変わってきました。（記録者／榎本・山本）



自分だけのくるくる棒をつくりたくなり、「先生やって」とリクエスト。できあがりを楽しみに待ちながら、傍でどうやってつくるのかをのぞき見…。“これならできるかも”“やってみたい”という思いが芽生え「先生見ててな」「ちょっと手伝って」と言いながら、繰り返し挑戦！「できた」「もっとやりたい」と、子どもたちの好きな遊びになっていきました。

（記録者／榎本・山本）

先生と一緒に安心♡



大好きな5歳児のお姉ちゃんにリボンをつってもらって嬉しかった子どもたち。可愛いリボンを自分でもつくってみたい気持ちが芽生えました。先生や友だちと何回もつくっているうちに、とっても素敵なりボンがつくれるようになりました。

（記録者／中村・植草）

みんな見て見て！



つくったリボンをつけてアイドルに変身！先生や友だちに「かわいい～！」と言ってもらって大満足。よりダンスにも磨きがかかる子どもたちです。（記録者／中村・植草）

友だちと一緒に



焼き芋パーティーで芋を焼いているのを見て「食べたいな」「部屋でも焼き芋つくっちゃおう！」と焼き芋づくりがスタート！できあがると「売りに行く！」と焼き芋屋さんになって、クラスの友だちだけでなく他のクラスの友だちや先生にも食べてもらい、とっても嬉しそうでした◎（記録者／津瀬・山本）

4 歳児

～育てたい子ども像～

- やりたいことが存分にできる子ども
- ありのままを認め合い、仲間を大切にする子ども
- 人やもの、自分も大切にしようとする心



12月11日 園内研究会（ひまわり組・こすもす組）

～感じたことや学んだこと～

『育てたい子ども像』を保育指導案に取り入れていくことで、具体的に実践していく意識が学年団として高まった。子どもたちの実態を探り、ねらいを深掘りしながら話し合いを重ねてきたことで、経験してほしいことがより具体的に見えてきた。そして、子どもたちが『育てたい子ども像』に近づいてきていることも感じる。また、『安心』とは何かを学年間で深く考え、対話することもあった。様々な見取りや考えを出し合うことで気づきがあり、自分の視点だけでなく担任間で対話をしたからこそ得られるものがあると実感した。対話から生まれた保育者の思いは“一人ひとりが大切にされる経験ができるようにすること”である。その思いを大切に寄り添ってきたことが『安心と挑戦を支える環境づくり』につながっていると分かり、園内研究会を迎えた。

子どもたちが興味・関心をもったことをきっかけに“やってみたい”と心が動く経験ができるように、学年間で保育を進めてきたことでたくさんの遊びが生まれた。次から次へと興味が移り、遊びが変わっていく実態に、“この見取りや環境づくりでいいのだろうか”と悩み、遊びを見取る難しさを感じた。また、子どもの“やりたい”を実現するためには、子ども一人ひとりの理解と保育者自身の保育力や応用力の必要性やタイミングの大切さを改めて感じることができた。指導助言からは、遊びの中で“何を楽しんでいるか”“どの楽しさの要素で遊びが続いているか”をしつかりと保育者が見取り、環境を構成していく大切さを学ぶことができた。これまでに得たことや学んだことから、子どもたちが“心ゆくまで遊べる”ような『安心と挑戦を支える環境づくり』に努めていきたいと思える機会となった。

After

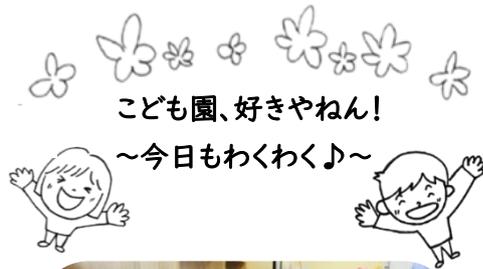
～その後の子どもたちの姿や変容～

- 子どもたちが何に楽しさを感じているのかを見取り、環境を準備していくことで、子ども自ら興味をもち、遊ぶ姿が増えている。
- 遊びを心ゆくまで楽しんだ経験から、“またやってみたい”“遊んでみたい”という思いが溢れ、やりたい遊びに向かう姿があった。
- やりたい遊びが見つかり、十分にできる環境があることで、より興味が広がったり“好きな遊びを友だちと一緒にする楽しさ”を感じたりして、友だちとの空間の中で満足して遊ぶ姿が増えてきた。
- 友だちとのかかわりが増えたことで、楽しい、嬉しいだけでなく、悲しい、悔しいなどの様々な思いも経験する機会になっている。
- 子どもたちなりに、思いやりをもった言葉かけが増えつつある。

～安心と挑戦を支えた保育者の心もち～

- 子どもたちの安心と挑戦を支えるためには、保育者一人だけの視点でなく、様々な仲間との対話を大切にし、新たな視点を取り入れていきたいと感じるようになった。
- 日々の保育を対話で振り返り、認められたり、アドバイスを受けていたりして、自信や改善のヒントにつながっている。
- クラス間、学年間の連携の大切さを改めて確認することができた。一人ではなく、互いに支え合って保育をしていると感じることができ、保育者同士の安心感や挑戦にもつながっている。また、保育者が安心を感じることも、子どもたちにとっての安心感になっていると分かった。

安心を基盤に挑戦している子どもの姿



やりたいことを存分に

「ちょっとそっち持ってて」

「先生やって」「先生、どうやってやるん?」と、保育者とかかわって好きな遊びを楽しむことが多かった子どもたち。やりたいことをとことん繰り返し、好きがいっぱい溢れてきた保育室が安心できる場になりました。同じ空間で遊ぶ友だちとつながることで、一人で作るには難しいところを、友だちと役割分担しながら表現し、楽しんでいます。

(記録者/岡田・里井)

虫とりが大好きで、隣の中学校の校庭で存分に虫とりを楽しみ、虫たちを保育室で飼育しています。休み明けにたくさんの虫が動かなくなっていることを見ました。何匹いるか並べて数えてみることに…。そこで、多くの命が亡くなったことに気づき、命について考える機会にしました。そして、虫を飼育している5歳児に飼育の仕方をきき、自分たちももう一度やってみることに…。飼育環境を変えたことで、虫たちが長生きするようになりました。虫が好きという気持ちに加えて、虫を思いやる気持ちが芽生えました。そして、友だちに対しても思いやる気持ちが少しずつ育ってきていると感じています。

(記録者/姫野・後藤)

大好きな仲間と



“走りたい”“走ることが好き”から、鬼ごっこ遊びに変化していきました。そして、自分の好きなことを楽しむ姿から“友だちと同じ空間で遊ぶことが楽しい”“友だちと一緒に”という思いも出てきました。今では、友だち同士で話し合い、アイデアを出して新しい鬼ごっこを生み出したり、ルールを決めて自分たちで遊びを進めたりする姿も見られるようになってきています。

(記録者/姫野・後藤)

安心できる場所に

「先生みたいに友だちに読みたい」とリクエストがあったので紙を準備すると、絵を描き「あるところに…」と手づくり絵本をクラスの友だちに披露し始めました。子どもたちは「どんなやろ!?!」と興味津々。日頃絵本を読んでいる場所だったので、少し恥ずかしかったけど“いつもの安心できる場所”“クラスの友だちや保育者に見守られる”ことで、とても嬉しそうな表情を浮かべ、世界に1つだけの手づくり絵本を読み進めていました。



(記録者/岡田・里井)

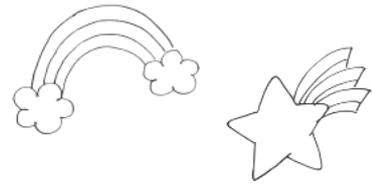
好きだからこそ大切に



5歳児

～育てたい子ども像～

- 自分のことを大切にする子ども
- 互いに認め合う子ども
- 挑戦や探求を楽しむ子ども



12月11日 園内研究会（にじ組・ほし組）

～感じたことや学んだこと～

進級当初は、“ぼく、わたしをみて！”とかかわりを求めたり、相手に威圧的な態度をとり、試し行動をしたりする姿が多くあった。担任との信頼関係づくりや一人ひとりの承認欲求を満たすための保育内容について、学年の担任間で話し合ってきた。

研究討議では、進級当初の姿から研究会当日の姿へと変容した要因を出し合いながら、成長や課題を振り返った。ロッカーの配置で小さな空間を設営したことで、それぞれの遊びにじっくりと向き合い遊び込めるようになった。また、素材や用具など使いやすく環境を整えることで、自ら選択でき、つくって遊びたくなったり、遊びに必要なものをつくろうとしたりする姿が見られた。子どもたちが、興味を示し遊び込むための環境構成の大切さを再確認した。今の5歳児の発達を鑑みて、共感したり伝えたりするだけでなく、子どもが自ら考えたり選択肢をもたせたりできるように、保育者の言葉かけも工夫をしている。子ども同士のかかわりでも、言葉を選んでいることや、遊びが展開していけるように程よい距離感でかかわれていると意見をもらい、発達に応じた安心と挑戦が循環する援助のあり方を深めることができた。

学年が上がるにつれ、抱っこやハグなどスキンシップが減り、言葉でのかかわりが増えてしまいがちだが、指導助言でいただいたキーワードでもある『5歳児だからこそハグ！』を合言葉に、保育者とのあたたかなかかわりを存分に味わえるようにしていきたいと思う。

After

～その後の子どもたちの姿や変容～

- 一人ひとりの好きな遊びが見つかり、安心できる空間ができてきたことで、遊びが盛り上がり、新たな遊びが生まれたりしている。
- 「そんなこと言われたら悲しいと思う」「どうしたん？大丈夫？」など、友だちの気持ちに寄り添い声をかける姿や「手伝うわ！」と一緒につくったり片づけたりするなど、友だちとかかわる姿が増えてきている。
- 子どもたちで遊びをつくり上げていく場も多くなっている。遊ぶ過程での思いの行き違いもあるが、互いの気持ちを伝えることで気持ちに折り合いがつけられるようになってきている。
- 保育室の空間を少し整理したことで、新たな遊びが展開された。その遊びの中で友だちとのやりとりを楽しむ姿がある。

～安心と挑戦を支えた保育者の心もち～

- 年下の友だちを意識しながら、言動を保育者も一緒に考えることで、こども園のリーダーとしての役割を再認識したり自分の姿を振り返ったりする機会となった。
- 安心できる居場所があることで、子どもたちの“はじめの一歩”が踏み出しやすくなった。また“失敗しても大丈夫”や“失敗は成功のもと”という合言葉によって、友だちや保育者とのつながりが深まり、仲間同士で支え合うあたたかなかかわりも増えてきた。
- 日々のさりげない保育者のかかわりや丁寧に認め支えている姿を、子どもたちは近くで見て感じて生活している。このあたたかなかかわりの積み重ねが、自尊感情を高め、他者理解や支え合う仲間づくりの根源となっていると感じる。

安心を基盤に挑戦している子どもの姿

大好きな居場所みつけた!

～安心から挑戦・意欲につながった子どもたちの遊び～

～おうちづくり～

保育室

ロッカーの隙間を用いて、家の屋根や部屋づくりを1学期から楽しんでいました。狭い空間で友だちと身を寄せ合う嬉しさや心地よさから、さらに楽しさを膨らませたようです。

(記録者/中野・内川)



遊びの場を繰り返し構成する楽しさ



助け合ったり
喜び合ったりできる仲間

満足するまで
チャレンジできる場と時間



屋上・廊下
遊戯室・園庭 他

～チャレンジタイム～

猛暑が続く夏も運動遊具に親しめるように、長い渡り廊下や遊戯室を活用! 「一輪車で端まで行きたい!」「難しいけど明日もやってみる!」など、友だちの姿に刺激を受けながら取り組んでいました。秋になると、3階の屋上に運動遊具を設営し「今度はホッピングにもチャレンジしたい!」と挑戦意欲が高まりました。

(記録者/佐々木・新保)

～ホームランや!～

ランチホール

ランチホールではルールのある野球遊びも楽しんでいます。

(記録者/佐々木・新保)



園内のどこでも選択して
遊べる環境

こども園の生活から
季節に応じた遊び方を
学んでいる



ダイナミックに遊べる
開放感



砂場の溝も遊びの場

～工務店ごっこ～

砂場・土

1年を通して遊び込んだ砂場での工務店ごっこ。一人ひとりが工務店の社長で「〇〇工務店」と呼び合いながら遊んでいます。大雨の日に見える砂場の大きな水たまりを見て「早く雨やんでほしいな～あの水たまり掘りたいな!」と遊びの目的を友だちと共有する姿もありました。

秋から冬、気温が下がり始めると長靴や上着を持ち出し、季節に応じた遊び方も生活経験から習得しているようです。

(記録者/中野・内川)

一時預かり保育

～育てたい子ども像～

○安心して過ごし『食べる・遊ぶ・寝る』ことができる子ども



安心を基盤に挑戦している子どもの姿

しえんしえー、してー!

保育者が子どもの気持ちをしっかりと受けとめて、一緒に遊んだり触れ合ったりすることで、にっこり笑顔。“○○してー!”と、泣いたり甘えたりして思いを伝えようとしてくれます。

(記録者/紀平)



モグモグ、スヤスヤ

保育者が抱っこしたり、傍にいたりすると安心♪食事の準備をしていると“早く食べたいなあ”とにおいに誘われている様子。自分から椅子に座って一口食べると「おいちー、グー!」「おかわりちょーだい!」と、モグモグ食べています。お昼寝も、スヤスヤ寝息がきこえてきます。(記録者/猪俣)

お昼寝
気持ちいいな…



給食、おいしそうやなあ💎



今日は何して遊ぼうかなあ♪

室内や園庭など、様々な場所に子どもたちの好きな玩具があり、それを知ること、目をキラキラさせながら遊びたい所へ一目散に向かって行きます。(記録者/猪俣)

一緒に、いないいないばあっ!

保育者に抱っこされ、揺れるモビールやキラキラ光るハンモックを見て“ほっと安心”する0歳児と赤ちゃんが好きな2歳児。「あれ?赤ちゃんがいない」と周りを探していると、赤ちゃんがずりばいをして自分の所へ来て仕切り板からのぞき込んで見ていることに気がつきました。すると、視線が合うように寝転び、仕切り板から「いないいないばあっ!」と顔を見合わせ、2人で笑い合い楽しんでいる声がきこえてきました。

(記録者/紀平)



③研究討議について（工夫したポイント）

ファシリテーターは、討議の柱に迫るために、子どもの心に変化した要因が探れるよう、時系列で出来事を追ったり、『安心と挑戦の循環』の図（こども家庭庁「はじめの100か月の育ちビジョン」より）を活用したりするなど、討議の進め方を工夫した。また、グループ討議の前にアイスブレイクをしたり、意見を肯定的に受け入れたりして、なんでも言ってOKな話しやすい雰囲気になるように心がけた。

話し合いの共有は『ミックスタイム』として、ききたいと思った他のグループへ移動し、ファシリテーターから内容をじっくりきける工夫をした。また、ファシリテーターの語る力の育成もめざした。

参加者の声



- ・発表しなくてよい、まとめなくてよいと思うと、プレッシャーがなくなり緊張せず意見交流に集中できた。
- ・他のグループの話し合った内容をじっくりきけて、分かりやすかった。
- ・楽しい雰囲気でした。

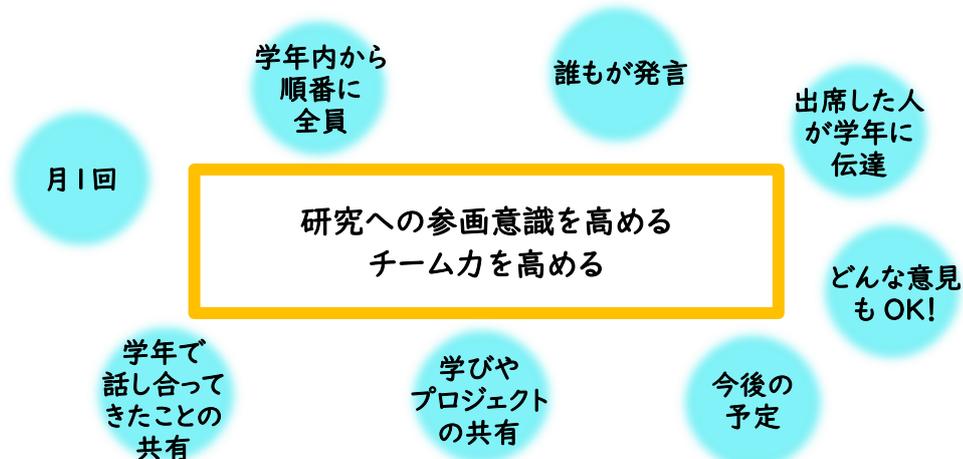
（3）会議・園内学習会・プロジェクトなどについて

①研究推進会議（おおぞらっこ会議）について

会議の初回には、職員がより参加しやすくなるような名称を募り、その後、全員の投票によって『おおぞらっこ会議』に決定した。事前に学年で話し合ってきたことや園内研究会・事例研究会で学んだことを共有したり、プロジェクトの進捗状況や今後の予定などを話し合ったりする場にした。

本園の課題として、発言することを躊躇する保育者や、悩みを打ち明けにくかったり、保育を語ることに自信がもてなかったりして、一歩踏み出しにくい保育者もいる。また、研究当初全員が研究にかかわっているという参画意識がもちにくいこともあった。

そこで、研究テーマでもある『一人ひとりが主人公』になれるように、月1回、研究推進会議を開催し、学年内から順番に全員が出席することにした。会議の中では、誰もが発言できる機会をもち、その内容を学年内で伝達共有するようにした。



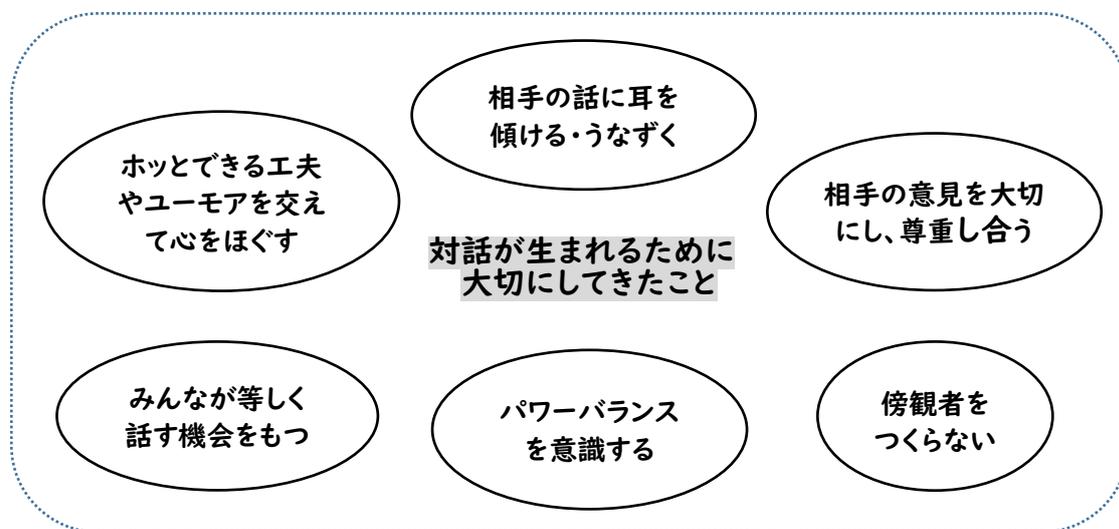
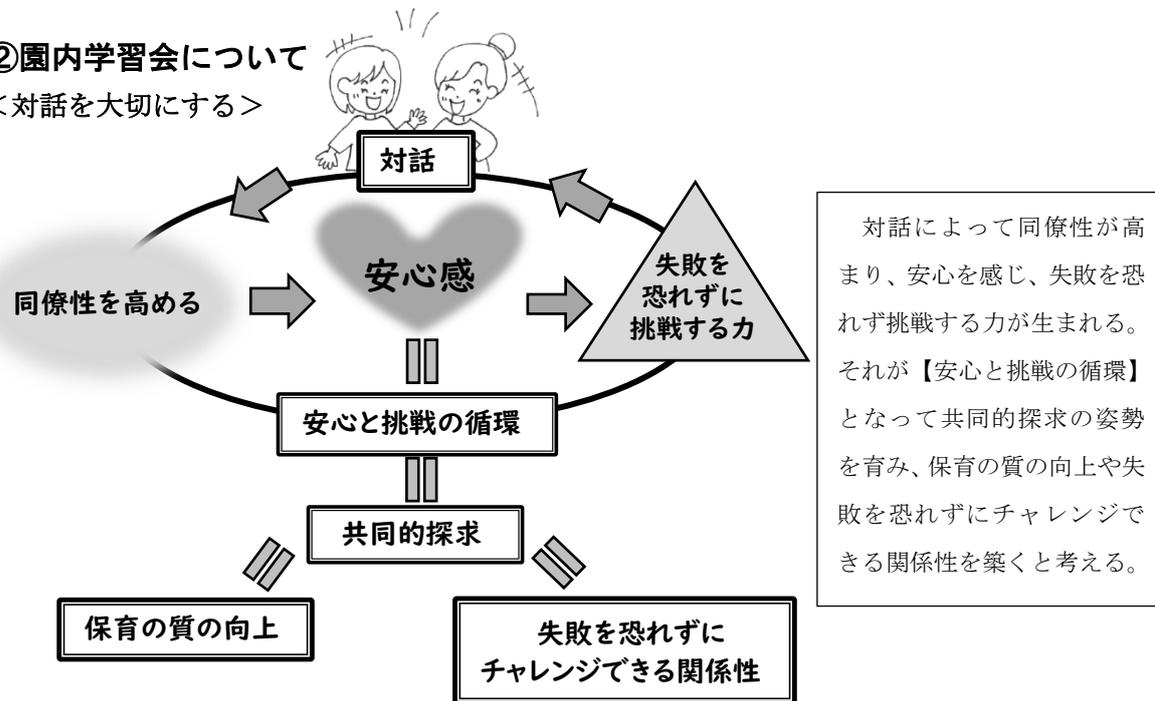
会議の中では“どんな意見でもOK！”と参加者が意見を言いやすく、話しやすい雰囲気づくりに努めた。場に慣れてくると、参画意識が芽生え自発的な発言が増えたり、学年代表として伝

達する機会を通して職員間のコミュニケーションにもつながったりしている。

今後も対話を大切にし、互いを理解・尊重しながら“なんでも言い合える関係”をつくり、全職員の研究への参画意識やチーム力を高める会議にしていきたい。

②園内学習会について

<対話を大切にする>



対話で得られたもの

- ・自分の意見にうなずいてもらえる嬉しさから、もっと話したい気持ちにつながった。→話すことの自信になった！
- ・自分の意見に注目してもらえ、自分が役に立っているという自己有用感もてた。
- ・色々な意見が出て、テーマに迫る話し合いが深まった。意見を出し合うことで“ああかな” “こうかな”と、ともに悩み、真剣に考え合うことができた。対話を重ねる中で、自分たちが大切にしたいことが見えてきた。→共同の探求へ
- ・対話（語り合い）をする楽しさを味わえた。
- ・同僚性が高まった。→失敗を恐れずにチャレンジするチームへ
- ・保育内容の悩みや相談を通して、保育の見通しがもちやすくなった。→保育の質の向上へ

<『育てたい子ども像』を語り合う>

年度初めの子どもの姿から、年度終わりにどんな子どもの姿になってほしいかを出し合い、『育てたい子ども像』を決めた。『育てたい子ども像』に向かって、何を大切に保育していくかを語り合い、今後の保育の方向性を共通理解する機会とした。10月には、『育てたい子ども像』に向かっていく途中経過を語り合った。今の子どもたちの実態から、保育環境・保育者の援助などを振り返った。また、大切にしたいことを保育者間で再確認し、保育環境の再構成やかかわり方の見直しにつながる、語り合いができた。

子どもたちと向き合いながら安心できる居場所をつくり、保育者が丁寧にかかわることで信頼関係につながった。また、挑戦の支えとなるように子どもの姿に応じた保育環境づくりを意識して取り組んだ。『安心と挑戦の循環』の中で子どもたちが成長し、日々の保育の積み重ねが『育てたい子ども像』につながっていくことを実感できた。

<園内研究会や研修会の報告をし、思いを共有する>

今年度は積極的に全職員が園内研究会や研修会に参加し、園内学習会で報告する機会をつくった。自分がどんなことを学んだか、どのように話すとみんなに届けることができるかなど、自分なりに考え、工夫しながら報告することで、学びがアップグレードするとともに、自信につながる一歩となった。

<司会をする機会をつくる>

主任保育教諭が司会をする機会をもち、園内学習会を進める経験をした。担任をしている保育教諭が司会をすることでより親近感が生まれ、場のあたたかみを感じられよい時間になった。また参加者からのあたたかいまなざしと拍手もあり、主任保育教諭にとっても達成感と自信につながる時間となった。



③取り組みやプロジェクトについて

子どもの『安心と挑戦の循環』を支えるためにも、保育者も安心の中、挑戦を繰り返すことができる職場の風土が重要となる。保育者一人ひとりのもちあじを生かせる取り組みを企画した。

<カリ前会議>

毎月学年全員で、カリキュラムについて話し合う時間をつくった。フリー保育教諭や主幹保育教諭、副園長も会議に入ることによって、子どもの姿やねらい、保育者の援助やかかわり、保育環境など対話を通し共通認識した。次月への保育に全員が同じ方向を見据えながら保育することができた。対話の機会が多くあり、悩みや困っていることもじっくり語り合えた。一人で抱え込まず、聞いてもらうことで心が少し軽くなり、“自分は一人ではない”



“周りのサポートがある”ということが実感でき、保育のヒントとなった。

<実習生・子ども体験>

保育者の希望で『実習生』や『子ども』になり、感じたことや気づいたこと、学んだことを伝え、受け入れたクラスも感想を伝えることで互いに学び合える時間とした。『実習生・子ども体験』を通して、子どもや担任の姿を俯瞰して見ることで、普段気づかなかったことにも目を向ける機会となった。体験者から「保育の細やかな流れを知ることができ、保育者の連携や互いを信頼している姿を見ることができた」「保育者の言葉かけや援助など、見ることで学びが深まった」という感想もあり、自身の保育を見直すきっかけとなった。



<おえかきプロジェクト>

『おえかきプロジェクト』を発足し、他薦や自薦で絵を描くことが好きな職員が集まった。おえかきプロジェクトメンバーが、冊子や研究報告のパワーポイントに活用できるように、研究テーマや志紀おおぞらこども園のイメージをイラストで表現し、語り合った。

冊子の表紙の絵は、イラストへの思いを学習会でプレゼンし、全職員の投票で決定した。イラストからは、メンバーのあたたかな思いが伝わり、見た人があたたかい気持ちになる効果があると感じている。また、メンバーも役に立ったという自己有用感につながった。



<アイスブレイク>

普段、話す機会の少ない保育者同士が話すきっかけになるように、アイスブレイクを取り入れた。思いがけず見つけた共通点から、親しみを感じ話しやすくなったり、互いを知り“楽しい”“この先生こんな人やったんや”と笑い合える時間となったりした。また、この時間が、同僚性の土台である『安心して対話できる園の風土』となり、他愛もない会話ができる関係性が少しずつ広がって安心の輪が大きくなっていった。



同僚の先生の背中に耳をあてて♪こもりうた♪を、歌ってもらいました。人のぬくもりを感じて、ほっこりする時間でした。

5、成果と課題（次年度に向けて）

子どもたちの『安心と挑戦』を支えるための環境について研究を進めてきた。子どもの興味・関心を見取り、担任間での対話を通して環境づくりに力を入れてきたことで、保育者が安心基地となって、子ども自ら挑戦しようとする姿につながった。

しかし、整えた環境に興味を示さなかったり、継続して遊ばなかったりする姿も見られた。その姿を丁寧に見取り、『なぜ?』を考え合う機会として、環境の再構成や、保育者の言葉かけを見直すことができた。

次年度は、『安心と挑戦の循環』を通して、子どものウェルビーイングを高めるためにも、安心基地を土台としながら挑戦を促し、子どもの育ちに必要な豊かな『遊びと体験』について、対話を通して研究していきたい。

また、保育者の得意や強みを生かすプロジェクトを立ち上げ、子どもの学びや育ちにつなげることができた。次年度は、子どもの得意や強み、さらには地域力にも着目し、“チームおおぞら”のメンバー全てで『みんなDE対話』を実施し、子どもも大人も一人ひとりが主人公になれるように取り組んでいきたい。

～先生たちの感想から～

テーマの『安心と挑戦』というワードが頭に残りやすく、日々の保育や記録でも生かせた。

輿石先生の指導助言を通して、子どもの姿を肯定的に受けとめることができた。

理論を具体的な保育実践とつなげて語り合う中で、愛着形成の素地をしっかりと整えるためにも、保育者との信頼関係づくりが重要であると再確認できた。

研究テーマがあることで『安心できる環境とは』と考えるようになり、“保育を学ぶ”ということが分かった。

日々実践していることを、可視化する大切さに気づき、文字や写真を使って具体的で分かりやすい発信を心がけるようになった。そうすることで、職員間や保護者との対話にもつながり、今までやってきた保育が認められ、自信にもつながった。

園内研究会、園内学習会を通じて色々な人の意見をきくことが学びになった。

虫に対する苦手意識があったが、子どもの姿を通して、克服することができた。子どもの姿から自分自身も挑戦できていると感じる。



『安心と挑戦』により迫っていく

次年度に向けて

子どもたちの姿を丁寧に
見取り、環境づくりをする



人権意識や研究への
参画意識を高める

“チームおおぞら”～支え合える職員集団になるために～

『一人ひとりが主人公』『チームおおぞら』と掲げているが、本当に一人ひとりが主人公と実感できているのか、チーム意識をもち思いを一つにできているのかなど、職員からの意見や振り返りの中で感じることもあった。時間に追われることや余裕がなくなってしまうことも多くあり、一人ひとりの異変に気づき合える関係性の構築、思いや考えを伝え合ったり、本音で語り合ったりする機会をもつ必要性を感じている。対話するおもしろさや、違う意見を知り保育の引き出しが増える嬉しさにつながる取り組みを研鑽していきたい。

子どもたちの育ちを支え、私たち大人も育ち合っていけるよう、ちょっとしんどく感じたり悩んだりする時には“みんなにきいてみよう”“みんながいるから大丈夫”と気軽に相談でき安心できるチーム、目的に向けて支え合い一致団結できるチームをめざして、今後対話を深め、研究を進めていきたい。

令和7年度
八尾市立志紀おおぞらこども園
幼児教育研究<1年次>職員



1歳児

<うさぎ組>
花市裕美・諸沢由樹・金木雅代
<くりす組>
福井志穂・加本愛真・小森美栄

0歳児

<ひよこ組>
田村早希子・山口周子

2歳児

<きりん組>
岡林弓佳・小田愛理・山口実香
<ぞう組>
木ノ本桜・寺田紗由美・柳博美

3歳児

<いちご組>
津瀬陽菜乃・山本佳代子
<めろん組>
榎本千也・山本理恵
<ぶどう組>
中村彩花・植草敦子

4歳児

<こすもす組>
岡田沙季・里井佳子
<ひまわり組>
姫野あゆみ・後藤恵子



5歳児

<ほし組>
佐々木奈緒・新保比呂美
<にじ組>
中野宏美・内川智沙

一時預かり

<りんご組>
猪俣真奈美・紀平衣美



朝夕担当保育教諭

葭田瑞穂・中田景子
松本敏子・大野妙

調理室

<調理員>
梅田幸義・中山誠人・菅原美希
吉田和香子・田中敏江
<栄養士>
黒田昇平・山内美奈子

職員室

<園長>岡内郷子 <副園長>南真由美
<主幹保育教諭>
小澤眞由美・川口恭子
東條有里子・森川佳子
<看護師>
金澤智美・金物谷真紀
<事務員>
植田悠李



フリー保育教諭

白岩紗弥・松井賀恵子・川元まさみ
藤本位子・西岡直美・渡邊康子
中尾優希・佐倉つくし・菅原るな

研究協力者

興石 由美子
(元大阪常磐会大学短期大学部准教授)

